

『韻鏡』『七音略』に関わる
転図の併合・分離について

平 山 久 雄

1 廃韻の位置

1.1 現存する最も古い形式の等韻図である『韻鏡』⁽¹⁾（張麟之の1161年及び1203年の2序をもつ）及び鄭樵（1104-1162年）『通志』「七音略」所収「内外転図」（以下『七音略』と称す）はいずれも43枚の図表（転図）から構成されるが、その中一部の転図にはかつて併合・分離などの改変を経過した形跡がある。それをまず廃韻を収める転図について論じたい。

廃韻の置かれる位置には不審な点がある。即ち「図1」に見られるように、『韻鏡』は蟹撰廃韻を止撰微韻（上声尾韻・去声未韻）を収める第九転（開口）・第十転（唇音及び合口）の入声三等欄に置き、「去声寄此」と注している。廃韻は相配する平声韻・上声韻を欠く去声のみの韻であり、かつ微韻には相配する入声韻がないので、このような措置が形式上は可能である。『七音略』はこれとやや異なり、廃韻開口（「刈」小韻一つから成る）⁽²⁾は『韻鏡』と同じく第九転三等入声欄に（但し誤って一等入声欄に）置くが、唇音と合口は第十六転の三等入声欄に置く。但し第十転及び第十五転の入声欄にも廃韻の韻名だけが記されている。

廃韻が入声欄を借りているのは、廃韻の属する蟹撰は去声韻の数が多く、去声欄にそれらのすべてを配する余地がない故と考えられてきた⁽³⁾。廃韻と同様に去声のみの韻である夬韻が第十三転（開口）・第十四転（合口）の入声二等欄に置かれるのは、そのように理解

「図1」『韻鏡』第九・第十転

平声				上声				去声				入声（去声寄此）			
一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等
		微韻				尾韻				未韻				廢韻	

「図2」『韻鏡』第十五・第十六転

平声				上声				去声				入声			
一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等
	佳韻				蟹韻			秦韻	卦韻	X	祭韻				

してよい。蟹撰に該当する転図は開合各々2枚ずつであるのに、二等韻は皆韻・佳韻・夬韻と3種があり、夬韻のために転図を更に2枚ふやすのを避けたと見られるからである。

ところが廢韻に関してはこの種の理解が実は成立たない。何故ならば、『韻鏡』『七音略』ともに、「図2」に示すように、蟹撰諸韻を収める第十五転（開口）・第十六転（合口）の三等は平声・上声・去声ともに空欄であり、廢韻はその去声欄（「図2」Xの位置）に入ることができた筈であるから。

小倉肇氏がかつて私信の中でこの事実を述べ、廢韻の位置を蟹撰諸転図のスペース不足から説明することの不合理を指摘して私見を質された。本稿第1章はこの問題に対する答案である。その初稿を小倉氏に呈して批評を請うたところ、歌韻・麻韻が転図を異にする問題は同じ観点からはどう考えられるか、その点にも論及する必要があると注意を喚起された（以上小倉氏の許可を得て記す）。本稿第2章はそれを契機に書かれたもの。これらの貴重な啓発に対し小倉氏に感謝すると共に、改めて同氏並びに大方の批判を請いたい。

1.2 結論から言えば、『韻鏡』『七音略』に先立ち、それらの43転図より2転図少ない41転図（第2章の所論に従えば、更に2転図少ない39転図）から成る等韻図がかつて存在したのではないか。『韻鏡』『七音略』第九転・第十転は「図1」の如く廢韻を除けば三等欄に微韻（及び上声尾韻・去声未韻）があるのみ。これを第十五転・第十六転の三等欄に移せば転図を2枚節約できる。そこで、『韻鏡』『七

「韻鏡」「七音略」に関わる転図の併合・分離について
平山

「図3」等韻図Q 第十三転・第十四転

平声				上声				去声				入声 (去声寄此)			
一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等	一等	二等	三等	四等
	佳韻	微韻			蟹韻	尾韻		泰韻	卦韻	未韻	祭韻			廢韻	

音略』に至る等韻図の歴史において、継承関係にあるP・Q・R 3種の等韻図を想定し、次の如き改変の過程を考えたい。

① 等韻図P（転序は少なくとも蟹撰までは『韻鏡』『七音略』と同じであったと仮定）の第十五転・第十六転は「図2」と同様で、但しXの位置に廢韻があった。因みに辻本春彦1986で廢韻は正に「図2」Xに当たる位置に配されている。同書は『広韻』の小韻代表字を反切とともに等韻図形式に配列した一種の校訂『韻鏡』であるが、転図をまず等位に分け、等位の内部を四声に分ける点、及び七音の配列順序が『韻鏡』とは異なる。

② 等韻図Qの作者は等韻図Pの第十五転・第十六転平声・上声の三等欄における空白に着目し、微韻を第九転・第十転からここに移すことで転図2枚の節約を図った。その際邪魔になる去声廢韻は入声欄を借りて移した。即ち「図3」に示す如くである。第十五転・第十六転は転次が繰上がり第十三転・第十四転となった。微韻をここに移すことができたのは、蟹撰三等・四等韻母の止撰三等・四等韻母への同音化のためである。この音韻変化に関しては1.3で説明を加える。

③ 等韻図Rの作者は、等韻図Qにおける微韻の扱いを不相当と考え、微韻の2転図を第九転・第十転として復活させた。切韻系韻書の韻目で「支脂之微」と続く止撰4韻中の微韻が「魚虞模」と続く遇撰3韻を隔てた蟹撰転図中に在るのは、等韻図に就いて文字を検索する際に不便であったに違いない。ところで、等韻図Rの作者が等韻図Qの第十三転・第十四転から微韻を取出す際、誤って入声欄の廢韻までも一緒に取出して、復活した第九転・第十転に収めた。廢韻・微韻とも小韻の分布が唇音・牙音・喉音に限られ、唇音は輕唇音であるなど、互いに共通する特徴をもち、かつ廢韻と未韻が同音化していたことが、誤りの生じた原因であ

ろう。

『韻鏡』は等韻図Rの状態を継承している。『七音略』の基礎である『七音韻鑑』（又は更にその先行等韻図）の作者は等韻図Rの誤りに気付いて修正を図ったが、修正作業は何故か途中で停止された。即ち、まず第十五転・第十六転の入声韻名欄に「廢」と記した上で、廢韻の主体を成す唇音字・合口字を第十転から第十六転に戻したが、作業はそこで中断され、第十転韻名欄の「廢」は消されず、「刈」字のみの廢韻開口は第九転に留められた。思うに『七音韻鑑』は写本だったのではないか。『七音略』の転図の主要部分は縦横の線で一様に仕切られ四声・七音の境界を示す標識がないなど、『韻鏡』に比べて単純素朴であり、『七音韻鑑』がもし刊本であったならば余りに工夫がなさ過ぎるのではないか。『七音略』は第二十五転（効撰）でのみ入声を陰声（母音韻尾におわる韻）にも配し、軽唇音をもつ転図で声母欄に「非・敷・奉・微」の四母を必ずしも記さず⁽⁴⁾、廢韻・夬韻に対して『韻鏡』の「去声寄此」に当たる注記を欠くなども、鄭樵が手にした『七音韻鑑』が整理の行き届かない稿本であった故ではないだろうか。

1.3 上記②項で想定した蟹撰三・四等の止撰三・四等への合流変化は、邵雍（1011-1077年）『皇極經世声音唱和図』（以下『唱和図』と略す）、趙与時（1175-1232年）『賓退録』卷一「射字」条の「叶韻詩」、また『切韻指掌図』（以下『指掌図』と略す）など宋代の諸資料に反映するが、この中で年代の古いのは『唱和図』であり、平田昌司（1984：191-200頁）はそれが邵雍の父邵古（986-1064年）の『正音』を大幅に襲っていることを明らかにした。『唱和図』は声母を十二「音」に、韻母を七「声」に分類しているが、その組織（特に「五声」）からは蟹撰三・四等の止撰への合流が推定される⁽⁵⁾。概略の音声を示せば [-iai] から [-i] への変化である。『唱和図』からは、今日の官話方言その他に広く見られる一種の舌尖母音 [-ɿ]（即ち [-ʔ]）の存在も推定される。『賓退録』の「叶韻詩」は七言七句の詩形式を用いた韻母リストであるが、そこには蟹撰三・四等字

はなく、止摂三・四等字「離」(開口)・「羸」(合口)及び「思」([-i])があるのみ⁽⁶⁾。『韻鏡』『七音略』とはほぼ同時期の作と覚しい『指掌図』⁽⁷⁾は当時同音化していた転図を大幅に合併して20転図とした等韻図であるが、蟹摂三・四等字は止摂を取める「十八開」「十九合」に併収され、蟹摂を取める「十七開」「二十合」の三・四等は空欄である。

一方、上記の合流を確かに示す資料は宋代以前には見当たらないようである⁽⁸⁾。日本の新漢音にもこの徴証はない⁽⁹⁾。9・10世紀を中心とする敦煌の漢藏対音資料では、一般に蟹摂三・四等は e, e'i (合口 we, ywe) と書かれ、止摂の i (合口 u, yu) とは異なっている⁽¹⁰⁾。南宋の標準的発音でも内部に差異のあったことは鎌倉唐音(宋音)の代表的資料である泉涌寺開山の俊苾律師(1166-1227年。1199-1211年入宋、臨安を含む江浙各地を遊歴)⁽¹¹⁾ 将来の「金光明懺法」16世紀写本の仮名による宋音読みで、蟹摂開口三・四等字は多く -ei で写されるのに対して止摂開口三・四等字が^s(歯頭音・正歯音二等が多く -u であるのを除き) -i で写されることに現れている⁽¹²⁾。

蟹摂三・四等の止摂への合流年代から見て、等韻図Q・Rは宋代に入ってからのものであるのが穏当であろう。而して等韻図Rは『韻鏡』『七音略』に共通の祖図と見られる。然りとすれば転序に関して、『七音略』は『切韻』本来の韻序に従い⁽¹³⁾、『韻鏡』は『切韻』本来の韻序と『広韻』の韻序との中間的な、恐らく唐末の音韻状況を反映する韻序に従っている事実⁽¹⁴⁾をどう理解すればよいか。思うに等韻図Pの転序は『切韻』本来の韻序に基づき、等韻図Q・Rを経て『七音略』に至るまでそのまま継承されたのに対し、『韻鏡』の先行等韻図は等韻図Rの転序を当時行われていた或る種の切韻系韻書の韻序に合うように改めたのである。転序の変更は、数字を書き改める手間の外はカードを並べ替えると同じ単純な作業であるから、比較的簡単に行なうことができたはずである。

2 歌韻・戈韻の位置

2.1 『韻鏡』『七音略』において歌韻を取める第二十七転と麻韻開

口を収める第二十九転、戈韻を収める第二十八転と麻韻合口を収める第三十転もまた、廢韻と同様の改変を経た形跡がある。即ち『韻鏡』『七音略』は果摂（歌韻・戈韻）・仮摂（麻韻）の名称を用いれば「果仮分立型」であるが、それらは一旦「果仮併合型」の段階を経た可能性がある。

それを示唆するのは第二十七転の牙音平声三等欄にあると期待される「迦」（見母）・「佉」（溪母）・「伽」（群母）の3小韻代表字が、両等韻図ともに欠落していることである。これらは、歌韻の唇音及び合口小韻が戈韻に分けられた際、戈韻の末尾近くにまとめ置かれた⁽¹⁵⁾もので、原本『切韻』に溯ると見られるのは「伽」小韻のみ、「佉」「迦」は『王一』『王二』『王三』⁽¹⁶⁾に初見し、『広韻』では反切下字が系聯する一類を成す。「伽」に対する『切三』の注音「無反語、噓之平声」の「噓」が藥韻開口三等群母/giak/であるのから推して、これら3小韻は実は平声歌韻三等⁽¹⁷⁾、即ち/-ia^ɸ/に相当すると見られている。3小韻はいずれも音訳用字や隱僻字から成るが、「迦」「伽」は仏教經典に用いられる音訳字として重要である。等韻図がもと釈家の手になるとの伝承から見れば、これらが転図に現れないのは奇妙である。同じく戈韻末尾にあり音訳語や隱僻字から成る点でも類似の性格をもつ「𪛗」（溪母）・「𪛘」（群母）・「𪛙」（影母）・「𪛚」（曉母、「靴」と同字）・「𪛛」（來母）、即ち平声戈韻三等/-iuɑ/と推定される小韻群の代表字が第二十八転に在る⁽¹⁸⁾事実と対比すれば、「迦」等3字の完全な脱落は一層不可解と言わねばならない⁽¹⁹⁾。

この疑問を解くには、第1章と同じく継承関係にあるP・Q・R3種の等韻図を想定し、これも第1章と平行的な改変の過程を考えればよい。P・Q・Rは第1章におけると同一の変容段階に属する等韻図という意味で同じ記号を用いるが、文字通り同一のテキストであっても構わない。むしろ同一テキストであり、従って同一人の手を経たと見るのが自然であろう。

- ① 等韻図P（転序は少なくとも果摂・仮摂までは『韻鏡』『七音略』と同じであったと仮定）の果摂・仮摂に当たる第二十七転から第三

十転までは、第二十七転牙音三等欄に「迦」「佉」「伽」が置かれていた以外は、『韻鏡』『七音略』と同様であった。歌韻と麻韻開口を一つの転図に纏められなかったのは、麻韻開口三等の音価は /ia/、歌韻三等の音価は /ia/ のように異なるので、たとえ声母に関して補いあう関係⁽²⁰⁾にあっても、それらが同一転図の三等欄に並ぶのは転図の構成原則に反するからであり、そのため歌韻は第二十七転を、麻韻開口は第二十九転を各々単独に占有した。これと平行して、戈韻は第二十八転、麻韻合口は第三十転を占め、かくて「果仮分立型」等韻図が成立した。

② 等韻図Qの作者は、第1章の等韻図Qが微韻に対して行ったと同じ転図節減の方針により、等韻図Pの第二十七転と第二十九転を合併させた。歌韻 /-a/ (一等)・麻韻開口 /-a/ (二等) の関係は、例えば第二十三転における寒韻 /-an/ (一等)・刪韻開口 /-an/ (二等) など、いわゆる外転系の諸転図におけると変わるところがないからである。その際、第二十七転牙音三等の「迦」「佉」「伽」は転図から削除して、 /-ia/ と /-ia/ が同じ三等欄に並ぶ不合理を避けた。これと同時に第二十八転と第三十転も合併され、かくて「果仮併合型」等韻図が成立した。

③ 等韻図Rの作者は、等韻図Qの「果仮併合型」に欠陥を認め、再び「果仮分立型」を復活させた。その欠陥とは、開合のペアをなす2転図における一等と三等の関係が一方では /-a/ : /-ia/、他方では /-ua/ : /-iua/ となり、主母音に平行性を欠くことであろう。或いは三根谷徹氏の説かれた如く(2.2参照)歌韻・戈韻の主母音が当時 [ə] 又は [ɔ] であったことが影響したかも知れない⁽²¹⁾。いずれにせよ、転図分割の際に「迦」等の3小韻代表字を第二十七転牙音三等欄に補う必要があったのに、Rの作者はそれに気付かなかった。『韻鏡』『七音略』ともに等韻図Rの状態を継承する。

2.2 上に論じたところの、歌韻 /-a/ と麻韻開口 /-a/ /-ia/ が、他撰との平行性から見て「果仮併合型」転図を構成する資格を十分もつと見えるに拘わらず、『韻鏡』が「果仮分立型」を採るのは何故か

との問題は、早く三根谷徹1953がその主題として提起したものであった。三根谷氏は『韻鏡』の時代に歌韻は音価が/ɔ/に変化していたため、麻韻開口/-a//-ia/と同一の転図に配することができなかった、という趣旨の解決を与えられた。このように仮定すると、『韻鏡』諸本が第二十七転を多く「合」とすることも了解され、かつ仮撰転図を「外」とするのに対し果撰転図を「内」とすることも理解しやすく、ひいては「内・外」注記全般の解明にも寄与する利点がある、と述べられている(1993: 98-100頁)。降って三根谷徹1978では、三根谷徹1976が唐代の標準語音として推定した8世紀末『慧琳音義』の韻母体系を当てはめると『韻鏡』の構成が比較的良好に説明できるとの趣旨が述べられているが、「内・外」注記の問題を論じた箇所(1993: 136頁)

〈果〉撰の内転については、その音声的実現が-ə 或いは-ɔのようであったとすれば説明がつくであろう。但し、音韻論的に/-ə -uə/と解釈することは〈遇撰〉の模韻/-uə/と衝突し、介音-u-に2種類の別を認めなければならないことになるので、採ることが出来ない。

と記して、三根谷徹1953参照との注を付す。『慧琳音義』における果撰の音価が中古漢語におけると同じく歌韻/-a/、戈韻/-ua/とされているので、かつてそれらの主母音を/ɔ/と見たこととの調整を図る必要が生じ、そこで上記の説明が加えられたのであろう。これは「果仮分立」の問題にも適用されると思われる。但し「開・合」注記に関して『韻鏡』「第二十七転」の「合」を説明しようとするれば、歌韻・戈韻の音声的主母音は-əよりも-ɔを採るべきであろう。「内・外」注記に関しては別稿で私見を述べたい。

2.3 三根谷徹1978(1993: 141頁)には『指掌図』が基いた宋代標準音の韻母体系が示されているが、麻韻の主母音 a に対し歌韻・戈韻の主母音は依然 a とされている。これも音韻論的な音価と見るべきもの。『指掌図』は当時同音化していた転図を合併した20転図から成るが、そこでは歌韻・戈韻と麻韻は「十一開」「十二合」を

構成し「果仮併合型」に復帰している。『指掌図』『十一開』が「迦」など牙音三等の3小韻を載せているのは、転図併合のつよい方針から/-ia/と/-ia/を取って同居させたか、或いは当時/-ia/が/-ia/に合流していたためであろう。因みに『唱和図』では等韻図の一等・二等の区別を声母の上に求めており、現代の音韻論的解釈に翻訳すれば、例えば平声歌韻一等見母「歌」/ka^平/に対して平声麻韻開口二等「家」は/kja^平/と解釈されている⁽²²⁾。即ち『唱和図』は/a//a/の区別を立てないため、歌韻三等・麻韻開口三等とも同じく/-ia/となる筈である。これは2.1の所述と矛盾するが、『唱和図』作者のすぐれて音韻論的な見方ではこうなるということで、『慧琳音義』『指掌図』に対する三根谷徹氏の解釈の如く、一等と二等の主母音を異なるものと見ることも可能であり、仮に歌韻三等・麻韻開口三等とも同じく/-ia/であっても、声母の調音部位の相違により[-ia]: [-ia]の如き音声的相違はあったと思われる。

2.4 ここで『韻鏡』第二十七転「合」の問題に戻りたい。坂井健一1956 (1995: 409-411)によると、『集韻』(1039年成書)では『広韻』平声歌韻の舌音(来母を含む)・齒音小韻がすべて戈韻に移されており、坂井氏はこれを当該韻母の合口化の反映と解釈している。これは舌音・齒音に限られた条件的音韻変化であり、『中原音韻』でも歌韻字の合口化(即ち戈韻字への同音化)はこの範囲でのみ認められる。『漢語方音字匯 第二版』所収の官話系8方言の中、合口化の範囲がこれと同じものは北京・済南・太原(但し文語音。太原白話音は一律に開口)、西安ではこれに加えて喉音も合口化して-uo(例:「何」xuo、牙音は然らず、例:「歌」kɛ)、武漢・成都・揚州では声母を問わず一律に戈韻字と同じく -o(音韻論的には/ua/と解釈の可能性がろう)、合肥では一律に -u である。『韻鏡』の基礎方言がもしこの武漢・成都・揚州の如くであったならば、第二十七転が「合」とされたことも理解できる。鎌倉唐音が歌韻・戈韻をオ段音で写すことは必ずしも原音 -o を意味せず、それが -ɛ の如き開口音であってもオ段音で写されたであろうから⁽²³⁾、第二十七転「合」の説明に

は役立たない。

3 幽韻の位置

3.1 『韻鏡』『七音略』と同時代、12世紀の南宋において、惜しくも佚して伝わらないが、これらより1枚多い44転図から成る等韻図のあったことが知られる。孫觀『鴻慶居士集』卷三十「切韻類例序」は次のようにいう。

今楊公又即其書（『集韻』を指す）、科別戸分、著為十條、為図四十四。推四声子母相生之法、正五方言語不合之訛。（中略）名曰切韻類例。

楊公は楊中修⁽²⁴⁾、その『切韻類例』は44転図と分かる。孫觀は北宋末大觀年間（1107-1110）の進士。趙蔭棠1957（99-100頁）は「切韻類例序」の執筆は1138年前後という。

近年同様に44転図から成る等韻図の存在を示す資料が新たに発見された。わが国会図書館所蔵の『盧宗邁切韻法』と題する写本⁽²⁵⁾に魯国堯教授（南京大学）が注目し、それに詳細な考証と分析を加えて魯国堯1992-1993を、更に増補改訂を施して魯国堯1994を發表された。これによると盧宗邁は江西大庾の人、汪澈（1109-1171年）の該地巡察の際に見出されて武官に任ぜられた。武官ながら文史を好み晩年の蔵書は数万巻に達した。同書1186年の自跋文には「四十四図」の語が次の如く二見する⁽²⁶⁾。

世伝切韻四十四図、用三十六母与集韻中字、随母所属、次第均布於図間。而有声有形与有声無形、万一千五百二十声、概括世之所有字、並在其中。（中略）每字在左右上下各有一字、声声皆別、如中央之視四方、各有定位、若周天之列宿、各有分野。四十四図字字皆然、其非通幽悟微之人、焉能造是。

『切韻類例』の転図が1枚多い理由につき大矢透1924（155頁）は、『韻鏡』第三十七転・『七音略』第四十転の尤韻・幽韻を別々の転図に分けたためと推定している。大矢氏が簡潔に図示するその意を述べれば、尤韻・幽韻はともに三等に配されるべき韻であるのに、『韻鏡』『七音略』は同一転図の三等に尤韻を、四等に幽韻を配して

転図を節減している。『切韻類例』はそれを不可として幽韻を三等に戻した結果、転図を1枚多く要したのである。幽韻を三等韻と判断したのは、韻内における声母分布の類型による。魯国堯1994(109-110頁)も前記2資料に見える44転図の等韻図につき同様の見解を述べている⁽²⁷⁾。

なお『切韻類例』など宋代の書名や文章に見える「切韻」は韻書『切韻』が「適切にして規範たるべき音韻」⁽²⁸⁾の意味であったのとは異なる。魯国堯1994(93-94頁)は宋・金・元の当時「切」は反切上字、「韻」は反切下字の意味に専ら使われ、「切韻之学」「切韻法」は明代以降に現れる「等韻学」の意であることを考証した。なお『切韻類例』『切韻法』などの書名から見ると「切韻」とは「反切の上字・下字から被切字の音を求める」という動詞的意味にも使われたように思われる。

3.2 辻本春彦1986においても、尤韻と幽韻は連続する2転図に分けられ、全体は44図である。但し『韻鏡』の43転図に合せて、侯韻・尤韻を収める転図、幽韻を収める転図いずれも「内転第三十七開」とする。同書の場合は、幽韻が重紐韻であるとの認識が基礎にあり、幽韻転図において唇音小韻は三等に、牙音・喉音小韻は四等に配されている。即ち尤韻唇音も幽韻唇音も同じく三等であるために、両者を同一転図に置くことはできないのである。辻本春彦1954(1978再録:66頁)は重紐小韻の類別判定に反切上字の類別を考慮する必要性を述べ、上字がA類(重紐四等)ならば被切字もA類、上字がB類(重紐三等)ならば被切字もB類との規則を立てる。上字がC類(重紐に関わらない三等韻)の場合には、被切字の重紐類別は反切下字から判定する外ない。これがいわゆる「類相関」であって、この基準に照らせば、幽韻唇音はB類、牙音・喉音は曉母「休」⁽²⁹⁾小韻一つがB類、他はA類である(『広韻』では「休」は対立するA類小韻「𪛗」に合せられ、牙音・喉音はみなA類となる)。いま『王三』幽韻(及びその上声・去声)の唇音小韻・牙喉音小韻の代表字と反切とをすべて掲げると「表1」のようになる⁽³⁰⁾。

「表1」

	平声幽韻		上声黠韻		去声幼韻	
	A類	B類	A類	B類	A類	B類
幫並明		彪 甫休 流 扶彪 繆 武彪				謬 靡幼
見溪群疑曉影	糶 居蚪 蚪 渠幽 聾 語蚪 蠱 香幽 幽 於蚪	休 許彪	糾 居黠 糶 渠糾 黠 於糾		蹠 丘幼 蚪 渠幼 幼 伊謬	

「表1」に見られる如く、平声では反切下字「幽」「蚪」と「彪」「休」とが各々一つの類をなし、曉母の下でA類・B類の対立を形成する⁽³¹⁾。上声は唇音を欠き、牙音・喉音の上字はみなC類であるが、敦煌毛詩音(S.2729残卷13行)の「𪔐」の音注「吉酉」により被切字はA類と証せられる⁽³²⁾。但し下字「酉」は尤韻上声の有韻である。去声では明母「靡」はB類、影母「伊」はA類。下字が一類をなすのは、適当な下字がA類「幼」・B類「謬」の外にないためである。『慧琳音義』の反切では上記の幽韻重紐の類別が上字から一層明瞭に証される。但し幽韻B類は尤韻と合流している⁽³³⁾。松尾良樹1978は『広韻』の反切を対象に、平山久雄1980(63-65頁)は敦煌毛詩音の反切を対象に、各々同様の結論を出している。

3.3 辻本春彦1986が尤韻と幽韻の転図を分けたのは、上記の類別判定により、『韻鏡』『七音略』が三等に配すべき幽韻唇音を四等に置くのは転図を一つにまとめるための方便に出ると見て、それを音理上正しい姿に戻したのだと考えられる。幽韻には少数の齒音小韻があり、『韻鏡』『七音略』では尤韻字の蔭に隠れている。隠僻字であるため実害はないが、幽韻の転図を独立させるならば、それらをも表面に出すことができる。

ここから導かれるのは本来の等韻図は辻本春彦1986の如く尤韻と

幽韻の転図を分けていたのではないか、との推論である。それらを一つに併せたのは第1章・第2章で想定した等韻図Qの段階であろう。尤韻と幽韻の小韻は声母と等位に関して補い合うに近い分布関係にあり、幽韻転図の三等を占める唇音小韻及び来母小韻を四等に移すならば、少数の齒音小韻が転図から隠れる外は、二つの転図を一つに併せても問題を生じなかった。更に推論を進めるならば、当時（宋代のいつ頃か）重紐の区別が実際には失われていた故に、唇音B類小韻を四等に移すことができたのではないだろうか。

私は上述の如く、『韻鏡』『七音略』の前史に流撰2転図の等韻図が存在した可能性、及びそれらの1転図への併合が重紐の（少なくとも唇音における）消失と関わる可能性を認めながらも、それを積極的に主張することは当面控えたい。敦煌発見の「守温韻学残巻」

（唐末頃の作かという）⁽³⁴⁾に含まれる「四等重軽例」⁽³⁵⁾においても、一等から四等への文字系列の中で「晦—~~無~~—浮—流」「衰—~~無~~—謀—繆」の如く平声幽韻唇音字「流」「繆」は四等に配され、平声尤韻唇音三等字「浮」「謀」と組合せられている。従って、まず「四等重軽例」に対して慎重に考察を加えねばならず、それにはなお暫らくの時を必要とする。ただ『韻鏡』『七音略』について言えるのは、重紐の区別が当時恐らく形式化しており、幽韻唇音が四等に置かれていても発音上の違和感は生じなかったであろう、ということである。『賓退録』「射字」で「叶韻詩」と対をなす「字母詩」は七言六句から成る声母のリストで、全清・次清・全濁・次濁の順に文字を並べるが、重紐A類声母を示す文字だけは「字母詩」の末尾に一括して置かれており、重紐区別の消失に伴ってこれらの文字が実際上不要となったことを示している⁽³⁶⁾。

3.4 『韻鏡』『七音略』の前史に流撰2転図の等韻図が存在したか否かの問題は別として、『切韻類例』44転等韻図、『盧宗邁切韻法』自跋文所見44転等韻図は、いずれも大矢透氏・魯国堯氏の言われる如く『韻鏡』『七音略』式の43転等韻図からの脱胎変化と見るべきである。それは両資料に見える44転等韻図がともに『集韻』に基づ

「表2」

幫	B類 ⑬彪：悲幽切 影・麤・捰	A類 ④麤：必幽切 瀟・影・彪・麤
並	B類 ⑨灑：平幽切 灑・捰 ⑭灑：皮虬切 灑・颯・灑	A類 ⑦麤：步幽切
明	B類 ⑮繆：亡幽切（所属字省略）	

くと記されている故である。魯国堯1994（99-107頁）は『盧宗邁切韻法』本文中の各種例字や反切が『広韻』とは一致せず『集韻』と一致する比率の高さを挙げて、自跋文にいう「切韻四十四図」が言葉どおり『集韻』と密接に関係することを裏付けている。

『集韻』の平声幽韻唇音にはB類小韻の外にA類小韻がある。『集韻』の平声幽韻唇音小韻を所属字共にすべて挙げると「表2」の通り。⑬などの数字は韻内での小韻の順序。

幫母⑬は『広韻』の「彪：甫休切」（所属字は他に「影」「麤」）を引き継ぎ、反切上字は「類隔」を改め『集韻』平声卷の原則に合せて平声字「悲」とした。④の代表字「麤」は『文選』李善注の「麤：必幽」⁽³⁷⁾による増補であろう。反切用字もそれを襲い、上字「必」（質韻A類）はA類を示す。「影」は『後漢書』李賢注の「影：必幽」⁽³⁸⁾による増補か。「麤」は『広韻』「麤：香幽切」の又音「風幽切」による増補であろうか。「彪」（説解：説文、虎文也）が④にも含まれるのは、「麤」「影」と同様に擬態語の構成要素⁽³⁹⁾と見てそれらの重出に合わせたものか。近似した複数音が擬音語・擬態語にあるのは珍しくない。因みに『集韻』平声幽韻の反切下字はA類字「幽」「虬」のみ、『王三』のB類下字「休」「彪」は『集韻』には現れない。これは、「休」が曉母A類「麤」小韻に吸収され、「彪」がA類④・B類⑬に両見するためと考えられる。

並母小韻⑨⑭は上字「平」「皮」がB類字であるから、いずれもB類小韻で同音と認めざるを得ない。代表字及び韻内の順序から見て⑭が『広韻』を引き継ぐもので、⑨は別に挿入されたもの。このような重複小韻は『集韻』に少なからず見出される⁽⁴⁰⁾。これらに対する⑦は上字が一等字「步」であるが、A類小韻と認めるのが妥当であろう。「步」は或いはA類字「頻」の右半を落としたものか。

3.5 上述の如く、『集韻』平声幽韻唇音には2箇の重紐A類小韻が存在する以上、『集韻』に依拠するを旨として等韻図の改編を企てた宋人は、転図の上にそれらの置かれる場所を用意しなければならなかった。齒音小韻「穢」(平声精母)・「慘」(平声生母)は『集韻』にも存在する。そこで幽韻のため更に1転図を増し、唇音B類小韻は等韻図一般の規則通りその三等に、A類小韻はその四等に配したのである。侯韻が尤韻転図・幽韻転図いずれの一等に配されたかは不明とする外ない。

佐々木猛2000は、辻本春彦1986に倣って『集韻』の小韻代表字を反切とともに等韻図形式に排列した書物であるが、『切韻類例』など44転等韻図について上に推定したと同じく、幽韻が独自で転図1枚を占め、④「麤」・⑦「麤」はまさに四等にあつて三等¹³「彪」・⑨「漣」と対立している。従つて佐々木猛2000は、幽韻に関しては『切韻類例』及び『盧宗邁切韻法』の「切韻四十四図」の姿を実質上復元したに等しい。侯韻は同書では尤韻転図の一等に置かれてい

註

- (1) 『韻鏡』及び『七音略』に関しては大島正二(1997: 258-280頁)を参照。
- (2) これは『広韻』と一致する。『韻鏡』が「刈」の外に「訃」(見母)を載せる(但し「訃」に誤る)のは『集韻』に一致する。また『韻鏡』は第十転の「廢」(非母)を第九転にも重出する。
- (3) 董同龢(1954: 78頁注2)に「去声祭泰夬廢四韻没有相配的平上入韻、(中略)夬廢兩韻没処安放、只好把廢韻字放在第九・十兩轉的入声地位、夬韻字放在第十三・十四兩轉的入声地位、注明『去声寄此』とあるのは、このような見方を代表している。
- (4) これら四字母を記すものは第二(鍾韻)・第二十(文韻)・第二十二(元韻)・第三十三(凡韻)・第三十四(陽韻)の諸転図、記さないものは第一(東韻)・第十(微韻)・第十二(虞韻)・第十六(廢韻)・第四十

- (尤韻)の諸転図。
- (5) 周祖謨1942(1966:601-602頁)、平山久雄1993(79頁、83頁)参照。
- (6) 周祖謨1966(663-666頁)、将邑劍平1995(68-76頁)参照。
- (7) 『切韻指掌図』については董同龢1948a、平田昌司1984(204-209頁)、大島正二1997(282-283頁)など参照。
- (8) 馮蒸1992(545-550頁)は『爾雅音図』の音注(すべて直音注)に止撰・蟹撰の合流が認められることを述べる。『爾雅音図』の音注は、五代後蜀(934-965年)の学者母昭裔(河中竜門人)『爾雅音略』によるとの清朝学者の説に馮蒸氏は一応従っている(511-513頁)が、馮氏も認める如く果たして母氏の手になるか否かはなお定論となし難い。
- (9) 沼本克明1997(411-457頁)「新漢音の分紐分韻表」参照。
- (10) 高田時雄1988(303-419頁)「資料対音表」参照。
- (11) 藤田俊教1972(422頁)参照。
- (12) 沼本克明1997(548-622頁)「宋音・唐音 統合分紐分韻表」参照。
- (13) 羅常培1935(522-526頁)、頼惟勤1958(1989:253-257頁)参照。
- (14) 平山久雄1992(188-192頁)参照。
- (15) 歌韻から戈韻が独立したのは8世紀の『唐韻』からと推定される。現存『唐韻』残卷(去声・入声を残す)において去声に箇韻・過韻が分けられているからである。『広韻』の平声歌韻・戈韻の小韻順序を歌・戈未分時代の切韻系韻書における平声歌韻と比較すると、もとの平声歌韻から開口一等小韻を取出して新たな平声歌韻とし、残された合口一等小韻は声母の順序を開口小韻と一致するように並べかえた上で平声戈韻とした(唇音小韻はもとの小韻順序に当たる位置に置いた)ことが分かる。その結果、もとの平声歌韻の韻末にあった三等開口小韻はそのまま平声戈韻の末尾に取り残されたのであろう。これら三等小韻の所属字が詩の押韻に使われることはまず考えられないし、また唐詩押韻の実態でも歌・戈両韻は通用なので、実際上はそれで問題ないのである。以上は「鞞」などの三等合口小韻にも当てはまる。
- (16) これら切韻系韻書の略称は劉復等1936に基づくが、『王三』即ち完本『王仁昉刊謬補缺切韻』はその後の発見になる。上田正1975(6頁)、大島正二1997(189頁)など参照。

- (17) 詳しくは龍宇純1960の校注(204-205頁)参照。
- (18) 但し『韻鏡』は「臙」を脱し、『七音略』は「癘」「臙」「鞞」を脱す。
- (19) 三根谷徹1953(1993:90頁)は、原本『切韻』に溯りうる「鞞」「伽」の2小韻(『切三』では各一字のみから成る)について「前者は胡音を後者は梵音を写したものである。故に、切韻の音韻体系を考究するに当ってはこの兩字の音は別途の取扱いを受けて然るべきものと言える」と述べる。これは原本『切韻』の音韻体系を論ずる際には留意すべきであるが、これらの代表する音節は中古音韻体系の「あきま」である/*iua^ɸ*/*/iɑ^ɸ*/の位置に入るものとして容易に中国語に定着する能力を有したことにも注意しなければならない。我々日本人がシェパード犬の「シェ」を[ʃe]/sje/と普通に発音できるのと同じである。なお、「伽」小韻の「茄」(釈義:茄子、菜、可食)は『広韻』に初見するが(麻韻「嘉」小韻の「茄」は『切三』から見えるが釈義は“荷莖”)、蔬菜としての「茄」は古くBC1世紀頃、王褒「僮約」に「別茄披葱」として見える(宇都宮清吉1967:260-266頁に影印する四部叢刊宋本『古文苑』所収「僮約」262頁第26行)。但し同書「僮約校勘記」(266-271頁)によると、この句は『藝文類聚』『太平御覽』卷500・卷598所収本にはなく(268頁)、『初学記』『古文苑』所収本に見える。同書(277-279頁)が現行諸本の母体として想定したX・Y・Z三種のテキストの中、この句は『初学記』『古文苑』本の祖であるYにあったということである。6世紀北魏・東魏の人賈思勰の著した『齊民要術』卷二の第十四「種瓜」の末尾には「種茄子法」の一段(西山武一等1969:118頁)がある。
- (20) 麻韻開口三等小韻は『広韻』において正齒音三等・齒頭音・羊母(喻母四等)・来母・日母に限られる。この外、『韻鏡』舌音四等端母には外来語「爹」(『広韻』陟邪切、羌人呼父也)があり、その位置は反切上字「陟」(知母)には合わず、却って現代官話方言のdiēに合う。
- (21) 但し私はこの可能性をあまり重く見ない。この時代は既に韻図の草創期を離れ、等位間の音声的關係には関心が薄くなっていたことが考えられるからである。
- (22) 平山久雄1993(78頁)参照。
- (23) 影母字・匣母字はㄩと写されているが、これは必ずしも合口介音を

もつ原音形を意味しない。湯沢質幸1987(92頁)参照。

- (24) 『宋孫仲益内簡尺牘』卷三「与致政楊尚書 二首」の注により名を「中修」と知られる。楊中修の伝は不詳。二首ともに「切韻類例序」に関わる内容で「切韻類例序」の全文が注に付載されている。
- (25) 『国立国会図書館漢籍目録』(57頁)に「1卷 宋盧宗邁撰 室町写 1冊 25種 綫 WA16-80」と記載。
- (26) 魯国亮1994(91-92頁)所引による。
- (27) なお、董同龢1954は本稿注(3)所引の文に続けて、『切韻類例』が44図であったのは去声のみの韻である祭・泰・夬・廢の4韻を收容するため1転図を増した結果ではないか、と述べる。しかしこの推測が誤りであるのは、これら4韻がみな開合の対立を内部に含む故、もしこれらのため転図を増すならば2転図を増す必要があることから明らかである。
- (28) 王顕1961(19頁左)参照。
- (29) 「休」字は平声尤韻曉母にも見えるが、『王三』におけるその釈義は「止」(龍宇純1968: 245頁により「正」を「止」に訂す)、平声幽韻「休」の釈義は「美」であり、異なる語を表わすと見られる。
- (30) 李栄1956(63頁)所掲による。
- (31) 董同龢1948b(560頁)が既にこれを指摘する。
- (32) 平山久雄1966: 左39頁。
- (33) 上田正1987(133頁)参照。
- (34) 周祖謨1983(958頁)。
- (35) 松尾良樹1978(8-9頁)の校録による。
- (36) 将邑劍平・平山久雄1999(297頁)。
- (37) 『文選』「呉都賦」の「麤駘麤喬」の注(106頁)。『文選集注』(卷九、67丁裏)の『音決』注もこれに同じ。
- (38) 『後漢書』卷六十上「馬融伝上」の「羽毛紛其髣髴」への注。標点本二十四史『後漢書』1960頁。
- (39) 「彪」は「彪蔚」「彪休」「彪煥」など二字の形容語を構成することができる。
- (40) 邵榮芬1984参照。

引用文献

- 上田 正 1975 : 『切韻諸本反切総覧』、均社単刊第一、京都大学文学部
中文研究室内均社。
1987 : 『慧琳反切総覧』、汲古書院、東京。
- 宇都宮清吉 1967 : 『漢代社会経済史研究』補訂版、弘文堂書房、東京。
- 王 頤 1961 : 『『切韻』の命名和『切韻』の性質』、『中国語文』97、
16-25頁。
- 大島 正二 1997 : 『中国言語学史』、汲古書院、東京。
- 大矢 透 1924 : 『韻鏡考・隋唐音図』、著者自印。(影印本: 勉誠社文庫
41、勉誠社、東京、1978年)
- 坂井 健一 1956 : 「集韻における果・仮禪の特色について」、『中国文化研
究会報』6-1、53-64頁 (1995 : 409-425頁)。
1995 : 『中国語学研究』、汲古書院、東京。
- 佐々木 猛 2000 : 『集韻切韻譜』、中国書店、福岡。
- 周 祖謨 1942 : 「宋代汴洛語音考」、(1966 : 581-655頁)。
1966 : 『問学集』上・下、中華書局、北京。
1983 : 『唐五代韻書集存』、中華書局、北京。
- 邵 采芬 1984 : 「釈『集韻』の重出小韻」、中国音韻学研究会『音韻学
研究』1、中華書局、北京、360-375頁。
- 高田 時雄 1988 : 『敦煌資料による中国語史の研究』、創文社、東京。
- 趙 蔭棠 1957 : 『等韻源流』、商務印書館、上海。
- 辻本 春彦 1954 : 「いわゆる三等重紐の問題」、『中国語学研究会会報』24、
26-29頁。(再録 : 『均社論叢』6、66-70頁、1978年)
1986 : 『広韻切韻譜 (第三版)』、均社単刊第二種、京都大学文
学部内均社。
- 董 同龢 1948a : 「切韻指掌図中の幾箇問題」、『国立中央研究院歴史語
言研究所集刊』17、195-212頁。
1948b : 「全本王仁昫刊謬補缺切韻的反切下字」、『国立中央研
究院歴史語言研究所集刊』19、549-588頁。
1954 : 『中国語音史』、中華文化出版事業委員会、台北。
- 西山武一・熊代幸雄 1969 : 『校訂訳注齊民要術』、アジア経済出版会、東京。

- 沼本 克明 1997 : 『日本漢字音の歴史的研究』、汲古書院、東京。
- 平田 昌司 1984 : 『「皇極経世声音唱和図」と「切韻指掌図」——試論語言神秘思想对宋代等韻学的影响——』、『東方学報』56、179-215頁。
- 平山 久雄 1966 : 「敦煌毛詩音残卷反切の研究(上)」、『北海道大学文学部紀要』XIV-3、左1-243頁。
- 1980 : 「敦煌毛詩音残卷反切の研究(中の2)」、『東京大学東洋文化研究所紀要』80、左1-69頁。
- 1992 : 「韻鏡二事」、『紀念王力先生九十誕辰文集』、山東教育出版社、濟南、188-197頁。
- 1993 : 「邵雍『皇極経世声音唱和図』の音韻体系」、『東京大学東洋文化研究所紀要』120、左49-107頁。
- 馮 蒸 1992 : 『「爾雅音図」音注所反映的宋初四項韻母音變』、程湘清主編『宋元明漢語研究』、山東教育出版社、濟南、510-578頁。
- 藤田 俊教 1972 : 「俊苐律師年譜」。石田充之編『鎌倉仏教成立の研究 俊苐律師』、法蔵館、京都、421-425頁。
- 将邑 劍平 1995 : 「『賓退録』射字詩の音韻的研究」、『東方学』89、63-78頁。
- 将邑劍平・平山久雄 1999 : 「『賓退録』射字詩的音韻分析」、『中国語文』271、295-303頁。
- 松尾 良樹 1978 : 「幽韻小論」、『均社論叢』6、1-15頁。
- 馬淵 和夫 1970 : 『韻鏡校本と広韻索引 新訂版』、巖南堂書店、東京。
- 三根谷 徹 1953 : 「韻鏡における歌(戈)韻の位置」、『東洋学報』35-3・4、81-99頁(1993 : 85-101頁)。
- 1976 : 「唐代の標準語音について」、『東洋学報』57-1・2、01-016頁(1993 : 115-129頁)。
- 1978 : 「宋代等韻図の構成」、『東洋学報』60-1・2、01-016頁(1993 : 131-145頁)。
- 1993 : 『中古漢語と越南漢字音』、汲古書院、東京。
- 羅 常培 1935 : 「『通志・七音略』研究」、『国立中央研究院歷史語言研

究所集刊] 5-4、521-535頁。

- 頼 惟勤 1958 : 「中古中国語の内・外について」、『お茶の水女子大学人文科学紀要』11、左31-59頁。
- 1989 : 『中国音韻論集 頼惟勤著作集I』、汲古書院、東京。
- 李 栄 1956 : 『切韻音系』、語文学専刊第四種、科学出版社、北京。
- 龍 宇純 1960 : 『韻鏡校注』、藝文印書館、台北。
- 1968 : 『唐写全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋』、香港中文大学。
- 劉 復 等 1936 : 劉復・魏建功・羅常培編『十韻彙編』、北京大学文史叢刊第五種(影印本:台湾学生書局、台北、1963年)。
- 魯 国堯 1992-1993 : 「『盧宗邁切韻法』述評」、『中国語文』231、401-409頁; 232、33-43頁。
- 1994 : 「『盧宗邁切韻法』述評」、『魯国堯自選集』、河南教育出版社、鄭州、81-130頁。
- 湯沢 質幸 1987 : 『唐音の研究』、勉誠社、東京。

東
洋
学
報

『韻鏡』: 龍宇純1960影印『古逸叢書』所収「覆永祿本」、馬淵和夫1970をも参照した。

『七音略』: 『元至治本通志六書略七音略』、国立北京大学、1936年。

『漢語方音字匯 第二版』: 北京大学中国語言文学系語言学教研室編、文字改革出版社、北京、1989年。

『後漢書』: 標点本二十四史、中華書局、北京、1965年。

『鴻慶居士集』: 孫觀撰、『常州先哲遺書』第一集所収。

『国立国会図書館漢籍目録』: 国立国会図書館、東京、1977年。

『広韻』: 『校正宋本広韻』、藝文印書館、台北、1981年。

『齊民要術』: 四部叢刊子部所収本。

『常州先哲遺書』第一集: 盛宣懷輯、武進盛氏刊、1899年序。

『切韻指掌図』: 北京図書館蔵宋紹定刊本影印、中華書局、北京、1986年。

『集韻』: 『宋刻集韻』、北京図書館蔵宋刊本影印、中華書局、北京、1989年。

『宋孫仲益内簡尺牘』: 孫觀撰、李祖暉編注、『常州先哲遺書』第一集所収。

『文選』李善注: 商務印書館、香港、1960年重印第一版。

『文選集注』卷八・卷九: 京都帝国大学文学部景印旧鈔本第七集、1936年。

第
八
十
四
卷

五
三
六

補記

本稿の想定すると同じく、現存する等韻図が複雑な改編の歴史を含むとの見解は魯国堯1994(125頁)にも見えるが、最近魯教授から贈られた『宋本広韻・永祿本韻鏡』(江蘇教育出版社、南京、2002年)の解説「宋本広韻・永祿本韻鏡合刊影印本弁語」(117頁。魯国堯・呉葆勤両氏の連名執筆)の一節(6頁)はこの見方を特によく表現しているので、次に訳出して紹介したい。

唐宋時代、等韻図は頗る流行したが、惜しくも唐代の等韻図は既に亡び、宋代等韻図もまた僅かに残るのみ、『韻鏡』『七音略』はその主たるもの、図表形式により『広韻』の音韻体系を表わしている。これらの韻図は「その来るや遠く、その人を指して名づくを得べからず」(『韻鏡』「序作」の語——引用者)、作者を考証する術はない。これらは民間文学の作品と同様、長期にわたる流伝の過程で人々の心血を常に澆がれ、漸次更改されて成ったものである。等韻図は多層的に形成された複合的産物であり、多くの層位の堆積を含むことを特に強調したい。等韻図を用いて音韻史を研究する際にはこの認識が不可欠である。

本稿がこれら堆積層の一端をもし探り得ているならば幸いである。

2003年1月、校正に際して記す。